故 近藤矩子助教授追悼録

近藤矩子さんを悼む

大塚幸男

あなたは妻として、母として、教育者として、お忙しい方でした。それだけでも大変なことですのに、教育の仕事を内側から支える研究生活にも、ただならぬ情熱を傾けておられました。あなたのフランス文学者としての御出発は、アシェット、ラルース両社の主催になるコンクールに、アナトオル・フランスを論じて一等に入選された時に溯ります。

爾来、フランス文学史上でも屈指の名文家の一人であり、何物にも囚われぬ積極的な自由人であるこの文豪を愛して、あなたは数々の業績を示されました。その第一は、中央公論社刊行の『世界の文学』の一篇、『ペンギンの島』の翻訳です。あれはかの文豪が、ようやくエクリヴァン・アンガジェとなった頃の作で、辛辣な社会諷刺によって聞えており、それだけ翻訳の困難なものでありますが、わたくしはお訳を読みまして、その翻訳がいかに原文に忠実で、いかに原作の風韻を伝えた立派な日本語であるかに、感嘆せずにはいられませんでした。それに巻末の「解題」も、あなたの学識が東西の文学にわたって並々ならぬものがあることを示してあまりあるものがありました。

あなたはまた、国際的な「アナトオル・フランスの友の会」の会員として、いくたびかあの会の機関誌に原稿をお寄せになり、アナトオル・フランスの孫にあたり、同時にかのエルネスト・ルナンの血をうけたリュシャン・プシカリさんの知遇を得て、プシカリさんから門外不出の関係資料を提供されるまでになっておられたと承っております。

そして、あなたが一昨年、教科書版として公にされた名作『タイス』の抜萃は、今も日本全国の大学で採用されています。さらに一昨年の秋には、佐賀大学における九州比較文学大会で、「アナトオル・フランスと日本」と題する御研究をも発表せられました。あのとき、御研究の準備と

して、一々カードにとられた抜き書きを手にしておられたのを見て、わたしはあなたの研究方法がいかに用意周倒であるかに、今更ながら敬服を新たにしたものでした。

これらのお仕事は必ずや永く残るであろうことを疑いません。

あなたの大好きだったアナトオル・フランスは、『わが友の書』のデディーカースで書いています。「私はその時分には、それほど人生を愛していた。恋する男のような信頼を人生に対して抱いていた。人生が私に対して苛酷になることがあろうとは、考えてもいなかった。とはいえ、人生は無慈悲なものなのである。それでも私は人生を咎めはしない」と、こう書いています。

人生は本質的に非情なものです。不条理なものです。はかないものです。かなしいものです。しかし矩子さん、あなたは生きる日の限りを生き、力の限り運命と闘って来られました。内なる呼び声に従って、やむにやまれぬ仕事への情熱の赴くままに、あなたのヴォカションに殉じられたのです。わたくしたちはただただあなたの前に頭を垂れるばかりであります。どうか安らかに永遠の眠りに就かれますようにと祈りあげます。わたくしたち、生き残っている者も、おそかれ早かれ、間違いなく、あなたのもとへ参ることになりましょう。（福岡大学教授、人文学部長。本稿は葬儀に際し弔詞として寄せられたものである。）

近藤矩子さんをしのぶ

三浦　進

故人をしのぶ文は、生前に故人と親しい関係にあった人によって書かれるのが、ふつうである。ところが私は、近藤矩子さんの生前に、親しい関係にあったわけではない。福岡女子大学の同僚といっても、故人は既婚の女性であり、私は所帯持ちの男性であるから、かりにもふたりが親しい関係にあるとみなされたら、この女の園では、どんな噂が飛びかうか、わかったものではない。だから、私はその危険を避けて、故人と親しくつきあうことは、しなかった。家族ぐるみの交際なら、親しくつきあうこともできたであろうが、残念なことに、私が近藤さんのご主人やお子さんにお会いしたのは、お葬式のときが始めてであり、言葉をかわしたのは、ひとことか、ふたことである。こんな私であるから、故人の家庭生活については、なにひとつ知らないのである。

私が知っている近藤矩子さんは、福岡女子大学という職場における同僚のひとりにすぎない。しかも、近藤さんはフランス文学、私はアメリカ史というように、研究者としての専門領域が、たがいに異なっていたため、私は故人と共同研究をしたり、学問上の論議をしたりする機会を、一度も持たなかった。彼女は一般教育課程に所属しており、その研究室が私と同じ四階にあったところから、ふたりは